第 12 回研究会

開催日時：2019 年 1 月 31 日　18:00～20:15

開催場所：早稲田大学戸山キャンパス　第１会議室

- 報告「「東日本大震災後の岩手県津波被災地域におけるアーカイブ活動の経緯と課題：大槌町安渡地域アーカイブプロジェクトを中心事例として」(野坂真招聘研究員、早稲田大学文化構想学部助手)

・コメンテーター：川島秀一氏（東北大学災害科学国際研究所）

・ディスカッション・モデレーター：中澤秀雄氏（中央大学）

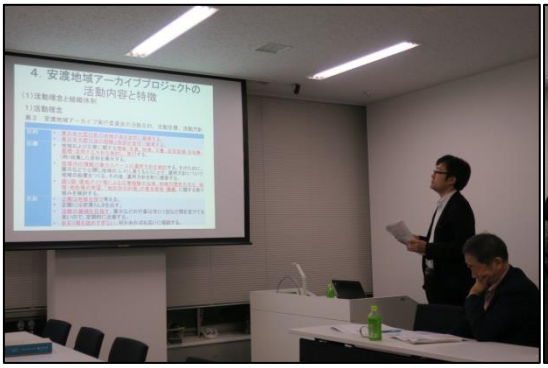
本研究会は、野坂真氏による「東日本大震災後の岩手県津波被災地域におけるアーカイブ活動の経緯と課題：安渡地域アーカイブプロジェクトを中心事例として」報告を材料に、アーカイブを用いた地域の再結合と世代継承、地域の持続可能性について、具体的に検討した。はじめに野坂氏から、安渡地区での活動に関する詳細な紹介を含めた研究報告を 40 分ほど受けた。その後、コメンテーター川島秀一氏から 30 分ほど、福島県新地町での調査地に暮らしながらの「聞き取り調査」実践の詳細な紹介を受けた。そこでは、第一に、被災者・被災地で収集している「災害の記憶」が、災害での経験にとどまらず、亡くなった人々や地域に関する記録、彼ら自身の個人史をも含む点が確認された。第二に、個人を通して歴史・社会をみる民俗学での姿勢において、調査地に住むことのもたらす利点と困難が明示された。さらに、震災前と現在の連結を可能にする現象・事物・関係性が相当数存在すること、つまり「歴史は今につながるものであるべき」という基本姿勢が提示された。

その後、モデレーターである中澤氏から２つの論点が提示され、報告者・出席者とでディスカッションを進めた。第一は、現在にもつながる「結い・ユイ」に着目し、そこには協力の文化と競い合う文化の両者が存在するが、そのバランスをどのようにとるのか、第二に、２人の報告で強調された「津波の後には旅の者が空白を埋める」という経験知に表される新参者が、どのようにそれ以前の文化を継承するのか、の２点であった。後者については、旅の者が地域の精神性を学ぶ姿勢の重要性が指摘され、それが調査者にもあてはまること、つまり自分の存在をさらして初めて信頼関係が成立することが強調された。

その後、第三の論点が参加者から提示された。すなわち、何を記録するのか、負の側面をどのように記録すべきか、あるいは可能かをとりあげた。議論のなかで出された意見を以下に列挙する。語る歴史と聞く歴史の双方を前提とすべき、精神面・気持ちをどう記録するか、次世代には書かれた記録でのみ伝えることが可能となる、「残せないこと」自体に意味がある、対立している複数の事象をどう残すか、当事者性のすり合わせが必要か、むしろすり合わせの過程の記録が必要なのか、人類学における参与観察が抱える困難さと情報共有が可能である、等であった。

以上のとおり、本研究会では、個人をとおして歴史・社会を記録する民俗学での手法を

社会学・人類学での手法と対比させつつ、活発な議論が展開された。本研究部門のねらいである方法論的検討において有益な研究会であった。



野坂氏による報告

全体討論

以上